（別紙２）　　審査結果の要旨

論文題目　『革命期ロシアにおける国家運営と民衆統合　モスクワ市から見る』

氏名　池田嘉郎

本論文の目的は、1917 年 2 月から 1921 年 3 月というロシア国家社会の全面的な再編の時期における国家運営と民衆統合の相互関係、具体的にはモスクワ市の国家機構・共産党組織と、民衆との相互関係を分析することを通して、革命後に形成されたソヴィエト共和国のもつ特徴と、その歴史的意義を解明することにある。分析に際して、モスクワ市の共産党組織、行政機構の未刊行史料、当時の新聞、刊行史料、などがひろく利用された。また周到な研究史の検討を踏まえて、とくに欧米諸国において近年有力な潮流となっている政治文化論的な方法に、新たな可能性を見い出そうとする。

第一部は、モスクワ市の国家組織と共産党組織の相互関係の詳細な分析を、その内容とする。権力を掌握したボリシェヴィキ活動家は、民衆の日常生活を保障するために機能的な行政機構を再建し、専門職務に通暁した人物を重用したが、その結果、行政機構は革命前と同じく、民衆層から遊離した存在となった。ソヴィエト総会も行政の論理に従属し、その活動の仕方も再編成された。その一方で、行政機構で活動する党員集団と、党組織で活動する党員集団との間で絶えず紛争が起こり、行政機関に入らない共産党員は独自性をあらわすためにも「官僚主義批判」のキャンペーンを開始したことなど、のべ７章にわたって当時の複雑な実態を詳細、かつ多面的に解明している。

第二部は党組織の活動内容を分析する。国の生活で行政が中心となるという第一部で確認した現実に直面し、脇役に転ずるのを危惧した共産党組織は、国家統治への参加に向けてではなく日常生活や労働のレベルで民衆に働きかけ、集団主義的な労働倫理を彼らに植え付けるという方向に活動の重点を移したが、代表的なスボートニク（土曜日に無報酬で行なわれる集団労働）キャンペーンも非体系的であり、内戦終結が迫るにつれて行政主導の体系的な労働動員に組み込まれ、独自性を失ってゆくこと、などが解明されている。

第三部は、国家機構を介した労働者の動員と、党組織を介した労働者の集団主義的な意識改革の試みという、重り合う二つの側面を分析し解明した部分である。労働動員も、労働者の意識改革の企ても十分な成果を挙げられなかった事実を踏まえて 1920 年の秋から全国的に精力的にとり組まれた「生産プロパガンダ」という企図は、革命後の国家機構・党組織・民衆の相互関係史上画期をなすものとの評価が与えられている。その画期性は、30 年代に確立するソ連社会の原型であるとの認識が示され、さらには「ソヴィエト人」という独自のネイション形成や、党組織の歴史的役割についても仮説的に議論が及んでいる。

本論文は、共産党と国家機関の相克、労働者と党組織の相互関係、モスクワ市の末端行政、さまざまなプロパガンダ、などの複雑な実態を、モスクワ市の行政と党組織の膨大な未刊行史料などに基づきはじめて解明した点で、国際的水準に照らしても重要な貢献である。また現時点における近・現代ロシア史研究を、新たな方法的視点から総合しようとする一つの試みでもある。たしかに、実証的に解明した部分を全体的展望の下に位置づける際や、独自の概念を設定する際に、議論をさらに彫琢し、隣接する諸領域の研究との対話を深める余地はまだ残されている。しかしながら本論文の達成した上記の顕著な成果を鑑みて、審査委員会は一致して、本論文に博士（文学）の学位を授与するのが適当であると判断した。